

学習院の歌

学習院の歌委員会

(歌委員会が保有する歌詞です。その他の歌がありましたらお知らせください)

《学習院》

輔仁会会歌 「積もらば遂に山とはならむ……」 曲は新旧あり 明治二年
修学習業の歌 「学びの園生は広げれど……」 明治三年
克忠克孝 「たぐひまれなるみくにけり……」 明治三年

《女子学習院》

金剛石・水は器 「金剛石も磨かすは……」 明治二〇年
はなすみれ 「うつらしてにほふ……」 大正十二年
月の桂 「代々木の杜に神とます……」 昭和九年
皇后陛下御誕辰奉賀歌 「日とし拜むすめらぎの……」 明治
幼稚園修身の歌 「わが子よかれと父母は……」 明治二七年

《学習院》

学習院院歌 「燃ゆる火の火中に死にて……」 昭和二六年

《周年記念歌》

学習院開校五十年記念歌 「濁りに染める人の世に……」 昭和三年
学習院創立百一年記念歌 「あかねさす目白の丘辺……」 昭和三年
女子学習院開校五十年祝賀唱歌 「心の玉を磨けよと……」 昭和十年
「畏きみあつその昔……」
「今日は何でたいお祝い日……」

初等科 学習院百年「学習院百年の……」 昭和五三年
学習院賛歌 「新しい世紀にむかって独り立つ……」 平成九年

《奉祝歌》

皇太子殿下初等科御卒業 奉祝の歌 「みくにをおぼしまなびこの……」 大正三年
皇太子殿下初等科御入学奉祝歌 「輝く二千六百年……」 昭和十五年

《学校行事》

幼稚園の歌 「きょうのあそびもすみました……」 昭和
女子学習院幼稚園の歌 「青山原を切り開き……」 大正七年
さくらのきしゅう 「みくらみくらみくらのきしゅう……」 昭和
初等科運動会の歌 「いつしか夏もすぎの戸に……」 大正
初等科うんどうかいの歌 「なるよはたかせ四谷のおかに……」 昭和

《寮歌》

学習院寮歌 大瀛の水 「大瀛の水精こりて……」 明治四一年
学習院学生歌 神州男児 「神州男児の心よ……」 昭和
昭和寮寮歌 「創造の歩み雄々しくも……」 昭和三年
青雲寮寮歌 「五月の空の深碧……」 昭和十五年
少年寮寮歌 「国旗掲げて九重の……」 昭和十年
昭和寮(新寮)寮歌 「歓楽の夢今覚めて……」 昭和二七年
昭和寮道遙歌 「春尚浅き丘の上……」 昭和二七年

《学童疎開》

疎開学童に賜りたる御歌 「次の世を背負ふべき……」 昭和十九年
日光学習院健男児 「母の笑顔に笑顔で答へ……」 昭和二十年
農耕の歌 「今日も晴れたり我が友よ……」 昭和十九年

《同窓会歌》

草上会の歌 「ほほえみあえばわかる心……」

昭和三四年

《心援歌》

学習院心援歌 「盛り上がる我等の力……」

昭和三一年

應援團心援歌メドレー

昭和

《輔仁会等部歌》

剣道部部歌 「桜は春を飾れども……」

昭和十二年

初等科剣道部の歌 「桜の花の咲き匂う……」

平成十七年

学習院游泳部部歌 「青葉若葉に風薫る……」

昭和十五年

学習院陸上競技部部歌 「鍛へんわれらが心……」

昭和五十年

ボイスカウト団歌 「目白の森に集いし我ら……」

平成十二年

がくしゅういん ほ じんかいかいか

学習院輔仁会会歌

作詞 不詳

学習院教授・小松 耕輔

輔仁会囑託・棚池 慶助 作曲
編曲

一 積らば遂に山とはならむ 田に見えぬ塵すら
くもい やま ちり な
雲入る山もその古は 塵よりや成りけむ
あわ たす
あ、我が友諸共に 助けつつ進まば
やま たか いちおひ おじた
山より高き功もならむ 怠らず努めよ

二 たまらば後は海とはならむ 消え易き露だに
ちりう つみ ころしえ
千尋の海もその古は 露よりや成りけむ
あわ たす
あ、我が友諸共に 助けつつ進まば
うみ ひか しやえ
海より深き業もならむ たゆみなく努めよ

三 積らば遂に山とはならむ 田に見えぬ塵すら
つも つい やま ん め み ちり
たまらば後は海とはならむ 消え易き露だに
あわ たす
あ、我が友諸共に 助けつつ進まば
つも つい いちかり わ な
心もかなひ力もあはば 何事かならざる

輔仁会（論語顔淵篇「君子 文ヲ以テ友ト会シ 友ヲ以テ仁ヲ輔ク」による）は明治二十二年（1889）に創立された学習院の文武活動の中心機関であり、会員は在学中の皇族、院長、教職員、学生である。一時は卒業生も会員となれた。

現在は、学習院各学校の課外活動が輔仁会各部となっている。

学習院教授・小松耕輔が作曲したが、米国の Geo. F. Root 作曲の The Battle-Cry of Freedom を活発に改編したといわれている。

現在は輔仁会囑託・棚池慶助編曲のものが歌われることが多い。

しゅうがくしゆぎょう うた
修学習業の歌

てんのうへいか めいじてんのう
天皇陛下 (明治天皇) より明治三十三年(1900)二月十日学習院に賜った勅題詠進
歌

御歌所寄人・中村 秋香 詠進
雅楽師兼楽師・奥 好義 作曲

一 まな そのう ひろ みち ひつ
学びの園生は広けれど 分け行く道はだた一つ

ちゅうじんにぎのおおぐさ せいばりたるおくにこそ
忠孝仁義の教え草 生い茂りたるおくにこそ

ちこくあんみん はるをじょうばんの花と咲け
治国安民のどかなる 春を常盤の花と咲け

つと いた みち おく はな
努めて至れ道の奥 いたりてかざせその花を

二 わざのはやしはしげけれど もみつるいろはみなおなじ
くわんこくご
勉励刻苦のつゆしもに そめつくしたるえだにこそ

ふこくぢゆうたかなる あきのこのみはむすぶなれ
富国強兵ゆたかなる あきのこのみはむすぶなれ

たゆまずあされはやしのうち あさりてたをれそのえだを
お

初等科、中等科、高等科で奉賀式 (左記) に奉唱
ほうがしき

- ・新年 (二月一日)、
- ・入学式 (四月八日)、
きげんせつ
- ・紀元節 (二月十一日)、
てんねんせつ
- ・天長節 (天皇陛下御誕辰日)、
てんぢょうせつ
- 明治天皇 (十一月三日)
- 大正天皇 (十月三十日)
- 昭和天皇 (四月二十九日)
- ・明治節 (十一月三日)

オホクチヂウヒトヤクヘクヘクヘ

克忠克孝

てんのうへいか

天皇陛下（明治天皇）より明治三十三年（1900）二月十日に学習院に賜った勅題歌

御歌所寄人・阪 正臣 詠進

楽師兼雅楽師・芝 葛鎮 作曲

- 一 たくひまれなるみくにふらり やまとしきのねのすへらき
は たくひまれなるみくにふらり やまとしきのねのすへらき
- 二 おほみたからのおやにして きみとあふかれおはしま
す おほみたからのおやにして きみとあふかれおはしま
- 三 君に忠なる人こそは やかておやにも孝ならめ
おやに孝なるひとこそは やかて君にも忠ならめ
- 三 忠と孝とはふたしなり くらにおほへはひとしなり
ひとしにふるひとくせひと くにのおやなる君かため

明治及び大正初期の奉賀式に奉唱された歌。

いんじせき みす うすわ
金剛石・水は器

じうじろへい か じちうけんじうだいらじう みうた
皇后陛下 (昭憲皇太后) 御歌

かきくじちかじうじ
皇后陛下より明治二十年(1887)三月十八日、華族女学校へ下賜せる

雅楽師兼楽師・奥 好義 謹作曲

いんじせき が す たま のひからはなはわらむ
金剛石もみかかすは 珠のひからはなはわらむ
ひと ひ まなひてのちじうぞ まじうの徳はあらはなるわ
人もまなひてのちじうぞ まじうの徳はあらはなるわ
じけいのはりのたえまなく めくるかじうく時のまの
時計のはりのたえまなく めくるかじうく時のまの
ひ げお は ば かなるわさかならさらむ
日かけをしみてはけみなは かなるわさかならさらむ

みす わ がい そのさまさまになりぬなす
水はうつはにしたかひて そのさまさまになりぬなす
ひと じわ とも よきにあじうじうしなるら
人はましはる友によろ よきにあじうじうしなるら
おのねにまねるよき友を えらひもよめしむとむわじ
おのねにまねるよき友を えらひもよめしむとむわじ
いじろの駒にむちうちて まなひの道にすすめかこ
いじろの駒にむちうちて まなひの道にすすめかこ

女子学習院で奉賛式に奉唱。
女子学習院で奉賛式に奉唱。

女子高等科・女子中等科で入学式に歌われている。

学習院の女子教育は、明治十年(1877)開院時は男子とは別の課程として女子小学があったが、女子教育学制変遷に伴い、明治十八年(1885)女子のみの華族女学校を四谷区尾張町に開校した。明治二十二年(1889)に麹町区永田町に移転した華族女学校は、明治三十九年(1906)に学習院に併合されて学習院女学部となり、更に大正七年(1918)に女子学習院として赤坂区青山に再び分離独立した。昭和二十一年(1946)に牛込区戸山町に移転した女子学習院は、昭和二十二年(1947)に学習院と合併し、私立学校の財団法人学習院となった。現在、幼稚園、初等科及び大学は共学であるが、女子中等科、女子高等科、女子大学は戸山校地にあり、女子部とも呼ばれている。

(1)の御歌は東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学)へも賜っており、また多くの高等女学校でも歌われていた)

はなすみれ

皇后陛下（貞明皇后）御歌

大正十二年（1923）三月十九日に女子学習院に賜る

音楽学校教授・信時 潔 謹作曲

うしうしう び じほふ おう
はる野 の はなすみれ
ひよのじうろに うしうしてしかな が

うしうしう び じほふ おう
はる野 の はなすみれ
ひよのじうろに うしうしてしかな が

女子学習院の奉賛式に奉唱。

大正十四年（1925）女子学習院の卒業式で奉唱された曲（「花すみれ」）は、
謹厳すぎるこの御意見があり、
信時・音楽学校教授が更に想を練ってこれに代わり謹製した曲が、
昭和の御代から歌われている。

女子高等科では

多摩 東御陵（貞明皇后陵）参拝の際に奉唱した。

つき かじひ
月の桂

皇太后陛下 (貞明皇后) 御歌
じうたいしうへいか ていめいこうじう

昭和九年(1934)五月二十八日に女子学習院に賜る
じょしがくしんじゆいん
女子学習院音楽教授・松島 彝 謹作曲

一 代々木の杜に神とます 後の宮のたまひつる
よよぎ もり かみ ねのつ みや
みおしえ にな あさゆう
あやにかしつき御教を 学びの庭の朝夕に
おもい おもひ
思ひいでてはおのがじし 身の掟をば定めなむ
み みの おきて さだ ん

二 みよのめぐみの露しげき いく春秋をおこたらず
そで いく はるあき
袖をつらねてむしまじく 道の一筋進みなば
たかね はな みち ひとすすす
高根の花もかざすべく 月の桂も手折られむ
たかね はな つき かじひ た お ん

三 世にたつ末も姫松の根ざし忘れずひたすらに
よ すえ ひめまつ ね わす
みさをの色を深めつつ 家を斉へ身を修め
かみ いえ ひとの え み おそ
心の鏡みがきえて 御国の光添へよかし
こころ かがみ みくに ひかりそ え

女子学習院の奉賛式に奉唱
ほつがしき
女子高等科・女子中等科にて卒業式に歌わわつる。

こごころへいかごたんしんほうがか

皇后陛下御誕辰奉賀歌

女子学習院講師・尾上 八郎 作詞
女子学習院音楽教授・松島 彝 作曲

一 日とし拜むすめろぎの 大御光にたぐひまし
みめぐみ おおみひかり
御恵ふかくすめぐみに 月と照ります尊さよ
つぎ てる じょう

二 父とし仰ぐ大君の いつの御かげにならびまし
ちち あお おおきみ
みなさけあつ くにたみ はは まも
御情厚く国民を 母と守らすかしこたよ

三 生れ出でましし今日の日を 千載の春のはじめにて
あ い きょう ひ ちとせ はる
うねこ はな
匂いやます花のごと みさかえいませ常若に
とこわか

女子学習院で地久節奉賀式に奉唱

・地久節（皇后陛下御誕辰日）

昭憲皇太后（五月二十八日） 明治時代の奉賀式次第では、唱歌「五月二十八日」

貞明皇后（六月二十五日）

香淳皇后（三月六日）

（新制）学習院の女子高・中等科では、占領政策に配慮したためか、
二番から歌うことが多かった。

幼稚園修身の歌

華族女学校長・細川潤次郎 作詞
音楽教師・奥久義 作曲

(孝の心得)

一 わが子よかれと父母は 寝てもさめても祈るなり
よき子になりて人の子は 親のこころをやすめばや

(忠の心得)

二 遠しおやよりしきしきに 仰ぎまじらてつかへこし
天津日嗣のかはりなき きみにつかへん我々も

(愛国の心得)

三 わが大君のしろしめす みくにはおやもいます国
心あわせてもろびとみ この日の本をまもれかし

明治十八年(1885)に開校した華族女学校に付属して、明治二十七年(1894)男女の三年保育の幼稚園が設けられ、昭和十九年(1944)まで存続した。
華族女学校(その後学習院女学部更に女子学習院)の幼稚園を卒業すると、男子は学習院初等学科(初等科)に、女子は華族女学校初等小学科(学習院女学部小学科、女子学習院小学科、本科又は初等科)に入学した。
(学習院学制の変遷に伴い科の名称が替わっている)

華族女学校幼稚園では、毎朝集会の際にこの歌を合唱した。

女子学習院幼稚園を卒業した男児は学習院初等科に進学したが、女子学習院の同窓会である常警会員の資格があるともいわれている。

がくしゅういんいんか
学習院院歌

学習院長・安倍 能成 作詞
音楽学校教授・信時 潔 作曲

- 一 もゆる火の火中に死にて また生るる不死鳥のこゝろ
破れさびし廃墟の上に たちあがれ新学習院
（しんがくしゅういんか）
- 二 花は咲き花はうつらふ 過ぎし世の光栄ふみしめて
まなかひに世界ををさめ 現実を生きてしぬかん
- 三 なげかめや 昔を今と 荒波よ狂わば狂へ
黒雲よゆくてはとゞせ 我が胸は希望高鳴る
- 四 二つなく享けし我命 おのがじし育て鍛へて
もろとも世にぞ捧げん 常照らせ真理と平和

旧制の学習院においては、各科を通じての校歌に相当する歌はなく、それぞれに奉賀式等に奉唱する歌があった。

新制の学習院になり、昭和二十六年（1951）四月に院歌が制定され、同年五月十九日の学習院大学開設二周年記念式典において発表された。

以来、各科（学校）の入学式、卒業式等の儀式や、集会などで歌われている。

昭和二十五年頃、学内に院歌の作詞を募集したが適当なものがなく、大東亜戦争後の占領下での学習院の復興の思いを込めて、安倍能成院長自ら作詞したと伺っている。

がくしゅういんかいごうじゅうねんきねんか

学習院開校五十年記念歌

高等科学生・林 道雄 作詞

瀬戸口 藤吉 作曲

- 一 濁りに染める人の世に 澄みて流るる一筋の
たまの小川の香りこそ その水上の丘に住む
清き心の若人が かざし忘れぬ桜花
水の随に随に訪め来れば 山には春のいと更けて
幾十の星を移せども 花瓔珞の影清く
翼うち交はす群小鳥 永劫の調べを歌ふかな
嗚呼憧れの丘の上 若き心に春去れば
真理求むる白無垢の 冷き衣脱ぎすてて
花散る蔭に草を敷き 緑の夢にまどろみぬ
吹く風音に秋づけば 星の黙示に友垣と
語らふ宵の多くして 茜かがよふ夕映に
晩鐘の声絶ゆる時 運命の小琴かきなでき
愛陵の秋にめぐり来し 今宵五十の花宴
拳げこそ受へる 盃に 更に誇らん幾歳の
栄の春を想ふとき 若き血潮は燃ゆるかな

昭和三年(1928)十月十八日の開校五十年記念祝典式において斉唱。
昭和二年が、明治十年(1877)神田開業より五十年であるが、
諒闇につき、祝典は一年延期された。

注一 諒闇(のようあん、みものおもひ) 天皇服喪期間(二年)

がくしゅういんそしゅうしひひやくいちねんきねんか

学習院創立百一年記念歌

高等科学生・片野 強 作詞
高等科学生・山田 和男 作曲

一 あかねさす^{めいさ} 田白^{おかへ}の丘^か辺^と 緑^{みどり}じき若草^{わかぐさ}踏^ふみて

そよ風^{かぜ}に友^{とも}とただたずみ 白金^{しろがね}の富士^{ふじ}の高根^{たかね}と

ちぎりたり清^{きよ}き心^{こころ}を

二 君^{きみ}知るや我等^{われら}がしるし そのかみの京^{きやう}の都^{みやこ}に

大君^{おおきみ}のたうゑ給^{えたま}ひし さくら木^きは今^{いま}ぞかをりて

百^{もも}とせのよはひかさねぬ

三 吹^ふきまくるたけきあらしに 散^ちり失^うせし蕾^{つぼみ}いくつが

荒^あれ果^はてし都^{みやこ}の野^の辺^へに 一^{ひこえた}枝^{えだ}の若^{わか}き芽^め吹^ふきと

萌^もえ出^いでむ我^{われ}ら若^{わかし}人

四 いでたたむ新^{あた}しき野^のへ ゆく道^{みち}はせまくけはく

ちりにみちじににみてむ 清^{きよ}らなるわれらがしるし

おほらけき胸^{むね}にかきつ

弘化四年(1847)三月九日に京都に公家の学問所として学習所が開講し、嘉永二年(1849)四月七日に「学習院」の勅額が下賜され、学習院が正式名称となった。その後維新による変遷があり、明治十年(1877)に華族会館が神田錦町に開業した私立学校が天皇陛下より校名を学習院と賜りこの勅額が下賜された。明治十七年(1884)に宮内省所管の官立学校となったが、大東亜戦争終戦による占領政策により、昭和二十二年(1947)再び私立の財団法人学習院となった。(その後学校法人学習院) 京都開講から百一年目に当たる、昭和二十三年(1948)五月二十九日から四日間行わたる式典、文化大会、運動大会において歌唱。

じょしがくじゅういんかいじじじゅうねんしゅくがじょうか

女子学習院開校五十年祝賀唱歌

本院学生 作詞、作曲、本院教官 編曲

その一 高等科・本科後期用

- 心の玉をみがげよと 後の宮のたてまし
わ まなびや いそとせ いわうきょう
- 我が学舎の五十年を 祝ふ今日こそめでたけれ
かすひ えだ たお たまえ
- 桂の枝を手折れよと よさし給へるこの園に
いくせ あめき はえ いの ん
- 幾千の秋の栄あれと いざや祈らむもるともに
はな や えびかり やまじじょう
- しるしの花の八重桜 大和心にほひ出で
みくこ ひかり そえ めぐみ
- 御国の光さし添へて あつき恵にこたへなむ
えん

その二 本科中期用

- 畏きみあとその昔 とどめ給へるこの園に
かし せむかし たまえ その
- 姫御子方もましまして 光たふとき五十年
そほ かよい はは まな
- 祖母は通ひぬそのむかし 母も学びしわれもまた
あやめう その むかえ
- 朝夕はげむこの園に 栄めでたき五十年
みおしえ まも みめぐみ
- 御教かたく守りつつ 御恵ふかく身にしてい
つと その ほまれ
- ともに勤めんこの園に 譽をいよよ高むべく
その たか

その三 本科前期・幼稚園用

- 今日 はめでたいお祝ひ日 私たちの学校が
きょう いわいび わたし がっこう
- 五十になったお祝ひ日 めでたいめでたい誕生日
いじゅう いわいび たんじょうび
- お庭の菊もつれしそつ お屋根の鳩もつれしそつ
にわ きく やね はと
- この学校の誕生日 祝ってみんなうれしそつ
がっこう たんじょうび いわい
- 私 たちも元氣よく 祝の歌を歌ひませう
こゑ げんき いわい うた うたい
- 声をそろえてうたひませう 代々木の森にびびくまで
こゑ しよ ぎやぎき せう

華族女学校は、明治十八年(1885)十一月十三日に華族の女子のための官立学校として学習院とは別に、四谷尾張町(現在の初等科地)に開校した。

明治二十二年(1889)には永田町(現在の参議院議長公邸地一帯)に移転。

華族女学校は、明治三十九年(1906)に学習院と合併し、学習院女学部となった。

学習院女学部は、大正七年(1918)に青山(現在の秩父宮ラグビー場一帯)に移転し、女子学習院として再び分離独立した。

昭和二十一年(1946)には戸山町(現在地)に移転。

女子学習院は、昭和二十二年(1947)年に、学習院と合併して私立学校の財団法人学習院(昭和二十六年(1951)に学校法人学習院)が発足した。

現在の戸山校地には、女子部と称される学習院女子中等科及び学習院女子高等科並びに学習院女子大学がある。

この歌は、昭和十年(1935)十一月十三日に女子学習院開校五十年記念式典が挙行された際に歌われた。(注―華族女学校開校より五十年)

当時の女子学習院は幼稚園(三年)、本科(十一年)、高等科(二年)よりなっていた。本科は、現在のほぼ小中高にあたり、前期四年制、中期四年制、後期三年制であった。

幼稚園は男女共学の三年保育であり、高等科は本科卒業後の二年制であった。

がくしゅうしんひゃくねん

学習院百年 (初等科)

初等科教諭・松山 市造 作詞
初等科教諭・高川 進作 作曲

がくしゅうしん

ひゃくねん

ひゃくねん

がくしゅうしん

一 学習院

百年の

百年の

学習院

いわ

いわ

うた

うた

祝えよ

祝えよ

歌え

歌え

がくしゅうしん

学習院

ばんねん

二 わつら花

はな

め

咲きひひく

め

咲きひひく

わつら花

はな

かがやく

かがやく

百年

百年

がくしゅうしん

学習院

ばんねん

三 学習院

がくしゅうしん

学習院

いつまでも

いつまでも

あたらしく

ひゃくねん

ひゃくねん

ひゃくねん

ひゃくねん

百年

百年

百年

百年

学習院

ばんねん

昭和五十三年(1978)制定

明治十年(1877)に開業した学習院は、昭和五十一年(1977)に創立百周年を迎えた。

学習院讃歌

あたらし せいぎ 新しい世紀にむかって

関根 榮一 作詞
桜友会員・服部 公一 作曲

あたらし せいぎ
新しい世紀にむかってひとり立つ たくましいその きが
われらじころのなかに 想いをたくわえるとき
常に足元をみつめ 大地を踏みしめる

う
打ちよせる時代のうねりの激しい今 ひたすらじころの道を
われらじころを開けて 想いを解きはなすととき
空に木樹の葉はひかり 大樹を渡る風

つた つつ やじな やへひ えり じゆつ ほじつ ほじ
伝え続ける左近の桜 襟の記章は母校の誇り
おおらかな愛と誠の花よ桜

うたじゆん せかい かな がくじゆいん むね は わ とも
歌声を世界に広げる 学習院 胸を張れ我が友よ
われらじころじつも 真理と平和を誓い
生きる喜びを共に さやかに呼びかける

せかい がくじゆいん
世界じびびけ 学習院

平成の御代に桜友会が新しい学習院の歌を求めて詞を公募したもので、平成九年(1997)に公表され、CDにも吹き込まれた。
一世紀を経た学習院の新しい世紀を詠っている。

皇太子殿下（昭和天皇）初等科御卒業

奉祝の歌

初等科 作詞・作曲

一 みくにをおぼし まなびの
をしえのりと あさにけに
ふみのはやしに おりたたせ
さきがけたまふ かしこやよ
二 まなびのまどの あけくねに
えがきたまへる ますかがみ
ひかりまばゆき はるのみや
あふぐけふこそ たふとけれ

昭和天皇は、

迪宮裕仁親王殿下

として、青山御所内の幼稚園から、明治四十一年（1908）に学習院初等科に

御入学になり、大正三年（1914）に

御卒業され、東宮御学問所に入られた。

大正元年（1912）に
大正天皇の踐祚に伴い（踐祚—皇統を継がれる）
皇太子殿下となられた。

御入学時は乃木希典院長、御卒業時は大迫尚敏院長

こうたいしでんかしきとうかごにゆうがく
皇太子殿下初等科御入学
ほうじゆくか
奉祝歌

初等科 作詞
小出 浩平 作曲

かがや にせんろっぴゃくねん
一 輝く二千年
さくらの花の美しい
よつちや
四谷の空に くつきりと
ほくろ じうじや
僕等の校舎がたちました

にっほんじゅう
二 日本中で お待ちした
こうたいしさま じゆうがく
皇太子様 ご入学
かはいい お椅子もお机も
むか
みんなお迎えしてゐます

かがや にせんろっぴゃくねん
三 輝く二千年
はる ひかり きようじう
春の光に 教室の
まご
お窓もきらきら 嬉しそう
こうたいしさま ばんばんさい
皇太子様 万々歳

こうき
皇紀二千六百年（昭和十五年）制定
四谷の初等科校舎は老朽化したため改築することになり、昭和十一年（1936）から初
等科は目白で授業を行った。
四谷の新校舎は昭和十五年（1940）三月に竣工、
こうたいしさまひこしきのついでんか きんじちりうごうか
皇太子明仁親王殿下（今上陛下）
の御入学を新校舎でお迎えした。御入学時は山梨勝之進院長
皇紀：神武天皇紀元とする日本の暦（西暦キリスト紀元より660年古）

ようちえん うた

幼稚園の歌（学習院女学部、女子学習院）

作詞、作曲不詳

原曲は、東くめ 作歌、滝廉太郎 作曲と思われる

きょうの あそびも すみました

みな つれだって かえりましょう

あしたも またまた こころきて

たのしい あそびを いたしましょう

せんせい いっしょにようちえんなら

昭和期に歌われたこの歌は、幼稚園のお帰りのときに全員が遊戯室に集まり、声を張り上げて歌ったという。

初期の歌詞は「あそび」ではなく、「けいこ」だった。

女子学習院の幼稚園（男女共学 三年制）は、昭和十九年（1944）に閉鎖された。

なお、新制の学習院幼稚園は、昭和三十八年（1963）に、田白の院長官舎跡に開設された。二年保育で男女共学である。

女子学習院

幼稚園の歌
ようちえん うた

あおやまはら き ひら
青山原を切り開き

かた いしがき
ついで固めて石垣を

あ あ あ あ
積み上げ積み上げ積み上げて

ようちえん
きれいな幼稚園ができました

この歌は大正七年(1918)に学習院女学部が青山に移転し、女子学習院となったあとに歌われたものと思われる。

ほしなゆき
保科順子氏(常磐会五十回生)の記憶による。

採譜 石川由美子氏

学習院初等科 運動会の歌
うんどうかい うた

作詞 不詳
伝小松 耕輔 作曲
林 友春 校訂

- 一 いっしか夏もすぎの戸に ちすやすすしき月の影
きり ひとは おお とら かり はかせ つき かげ
- 二 嬉しや今日は我が校の 秋の定めの運動会
うれ きょう わ こう あき さだ うんどうかい
したく そとじゅうしゅう しぐれ むね くも
- 三 互に競ふ勢は 風の薄起き伏して
たがい きそう いきおい かせ すすきお ふ
か はし はた した ばんざい しゆうゆうし
- 四 今日しも得たる優勝旗 腕はる子供ぞたのもしき
きょう え ゆうしゆうき うで こども
わね ま いじう にっぽんだんじ みばえ
- 五 負くればをかし勝てば猶 勇む心の運動会
ま おお かな なお いさ いじう うんどうかい
ひ こと たねま 結ぶは今日の楽しみぞ
ひごろ 勉めの種蒔きて 結ぶは今日の楽しみぞ
- 六 陽ははや西に傾きて 鳥も塙に急ぐなり
ひ にし かたむ どり ねぐり いそ
いざや 我等も己自 帰りに親に勝ばなし
われら おのがじし かせ おや かつ

この歌は大正期より昭和十年頃まで歌われた。
この楽譜は小松耕輔教授の作とされ、当時小松先生指導の下に歌ったもので、小松先生の書かれた原譜か否かは保証し難いが、原曲と殆ど変わるところはないと思われる。

平成四年十月十日 林 友春 記

しんどうかいのうた

初等科長・杉山 勝栄 作詞
初等科教諭・高橋 利根子 作曲

- 一 なるよはたかせ 四谷よっせのおかに
こころもはれて わきたつちから
げんきいっぱい スタートすれば
かげもひかりも はしるよとびよ
- 二 あかるいにわに うたごえひびき
そろうあしなみ うちふる手てぶら
みんなたのしく リズムにのれば
はたもいっしょに ゆねるよはずむ
- 三 あかかてしろかて ただしくつよく
さげぶおうえん あがるよはくしめ
大おおぞらあおいで ばんざいすねば
みているみている あの大おおいちよう

初等科唱歌

運動会では、一学年が東西二組の時は「紅白」の二色、東西中の三組になると「赤青黄」の三色であったが、東西南北の四組では「紅白」の二色に分かれて対抗戦を行っている。

初等科の運動場にある大きな銀杏は、幕末の山岡鉄舟邸の時代より、山岡家の銀杏として有名であったという。

山岡鉄舟・幕末明治の剣豪、明治天皇の侍従

学習院寮歌

大瀛の水

高等科学生・伊達 九郎（二荒芳徳） 作詞
学習院音楽教授・小松 耕輔 作曲

- 一 大瀛の水精こりて 一こ敷島のもとかたく
桜の露の濃やかに 染めて朝日の色あかし
春桃源の夢さめて 知りぬ東亜の風の音
思へ神代の昔より 天津日嗣の高御座
まがき玉の階に 匂ふ左近の桜花
折りてかざしに賜ひけむ 院の章の貴さを
皇城の北目白台 芙蓉八朶の秀麗を
窓に含める六寮の 健児三百雄々しくも
朝な夕なに競ひつつ 高き理想をたどるなり
稜威ふたび海外に 照り輝きて浪風は
暫し音なくなぎぬれど 見よ東洋の雲のさま
天上月は清けれど 影の波間にたゆたふを
セーヌの月に露光る 百合に美妙の香あり
テムスの岸の花薔薇 朝な朝なに新たなり
世は進むなり日に月に 夢路に人はある時も
仰がざらめや天皇の 自疆息まずのみことのり
嗚呼我友よ雨露の 恵みも深き君が代に
咲きて国土の華たらむ 目白の春の雲のじつ
- 二
- 三
- 四
- 五
- 六

明治四十一年（1908）寮歌募集の際の当選作を多少修正したもので、
学習院寮歌として広く知られている。学生総数三百人

学習院の寄宿舎・寮制度は、神田錦町時代の明治十一年(1878)に男子生徒の共同生活の場として、「生徒修業の便を謀り併せて行状を規正するもの」として、院内寄宿舎一棟が整備された。麹町三年町虎ノ門に移転した明治二十一年(1888)には二棟、四谷尾張町に移転した明治二十三年(1890)にも二棟であった。「青年舎」(中学)及び「幼年舎」(小学)である。(注―中学／小学の区分は概ね満15歳を境とする)

明治十七年(1884)の華族修学規則で「華族の子弟は原則として学習院に入学し、学科以上の男子生徒は(疾病又は正当な事故に由り入舎すること能わざる者以外)全員寄宿舎に入る」とこととされた。華族以外の士民でも品行方正で希望する者は入舎できた。

なお、明治二十七年(1894)には本格的な寄宿制は廃止された。

高田村目白に移転した明治四十一年(1908)には中等科高等科とも全寮制の六寮となった。青年部(高等学科生):「青年北寮」「青年南寮」、中学部(中等学科四五年生):「中学北寮」「中学南寮」「中学東寮」、幼年部(中等学科一―三年生):「幼年寮」であった。

大正二年(1913)には皇族学生用に「別寮」が開設された。(現・東別館)
大正十二年(1923)に全寮制は廃止され希望入寮制となった。

昭和十年(1935)に中等科二年生は原則全寮制となり「少年寮」に入寮し、昭和十五年(1940)年には希望寄宿の中等科三年生が「青雲寮」に入寮した。

目白校内の寮は、昭和二十年(1945)東京大空襲によりうち三寮が焼失している。

昭和三年(1928)には、下落合に高等科生専用の寄宿舎として、「昭和寮」が開設された。

昭和二十四年(1949)からは、新制大学生も入寮し、また前年開設された女子教養学園が入っている。

昭和二十六年(1951)に新制大学経費捻出のため、昭和寮(旧寮)は売却された。

昭和二十七年(1952)に下落合別地に新制大学生のための寮を新設し、寮名は同じく「昭和寮」(新寮)とした。新寮は

昭和二十一年(1946)に中等科は東京小金井市の文部省教学錬成所に分校し、錬成所旧学寮を寄宿舎とし、山梨勝之進院長により「光雲寮」と命名された。

昭和二十四年(1949)に中等科が新宿区戸山に移転すると、光雲寮を高等科生が使用するようになり安倍能成院長により「清明寮」と命名され、昭和二十六年(1951)まで使用された。

昭和二十六年(1951)に田口、

皇太子明仁親王殿下

みこみちあきらひとこみかのういでんか
義宮正仁親王殿下

のために学友も入れる皇太子寮が開設され、小金井の名をそのまま受け継ぎ「清明寮」とした。清明寮は、昭和五十二年(1977)に学習院創立百周年記念事業で新たな高等科中等科校舎が建設されるため取り壊された。

学習院学生歌

しんしゅうだんじ
神州男児

高等科学生・清岡 繁栄 作詞
高等科学生・澤 義道 作曲、藤原 義久 編曲

一 神州男児の心より 匂ひいでたる 桜花
しんしゅうだんじ こころ におほいであたる さくらばな

かぞへてにじに 愛城の 若草もゆる 丘の上
ひたひた みち はす あいじょうの わかくもゆる かのえの上
文武の道を励まんと 集う五百の健男児
ぶんぶの道をしげまんと じゆうごひゃくの けんだんじ

二 名も美はしき 静浦や 水際に続く老松の
な もみはしき しずらや みづべに つづく おまつ
梢に響く風の声 磯に碎くる波の音
すゝねに びびる 風のこゑ いそに くだる 波のね
吾等が雄図そそりつつ 大海原の雲に入る
われわれが おもむきそそりつつ たいかいげんのかげに入

三 青空高く朝日子の 森の彼方に昇る時
あおぞらたか あさひの もりの かなたの ぼへに ぼる とき
ひときわ 映ゆるもみじ 葉の 映らう池をたすらへば
ひときわ びびる もみぢ はの びらう いけを たすらへば
うらうらに響く百舌の声 胸の血潮ぞ躍るなる
うらうらに びびる 百舌のこゑ ちほの ちまゑぞ おどる なる

四 月影さえて霜白く 松の梢の叫ぶ時
つきかげ さえて 霜白く まつの すゝねの ねぶ とき
灯 淡き 武道場 雄々しく 集う 若武者の
あかり せめて ぶだうばう おおおしく じゆう わかむし者の
精気にみてる雄叫びは 目白が丘の誇りなり
せいきに みてる おもむきおほい は めがねが かのえの かしこまりなり

五 春若草の 心持ち 夏雄大の 氣にひたり
はるわかぐさ こころもち なつゆうだい きに びたり
秋清明の 霊を練り 冬洗心の 業をつむ
あきせいめい たまね ふゆせんしん わざをつむ
健児の 意気を 君見ずや わが校の名は 学習院
けんじ いき きみみずや わがこうの なは がくしゅういん

昭和初期より歌われている学生の愛唱歌である。学生総数が五百人である。

しちうわりのちうりゅうか

昭和寮寮歌

高等科学生 末正 久 作詞
山内 豊文 作曲

- 一 創造の歩み雄々しくも 生れ出でたる昭和寮
はじめ あゆ をを
ちからあふ せいこう お
こあいだ
- 力溢るる喜びに 五十の男の子相抱き
わか いのち たまゆら うたいあか たか
若き生命の瞬間を 歌ひ明さん高らかに
みずいろ やみ ともし かげ
- 二 水色の闇せまりきて 灯火の影のゆらぐ時
うた なが いざなえ ち く はな ひとひら
- 歌の流れの誘へば 散り来る花の一片に
はる お ち す ひ かえり
- くれゆく春を惜しみつつ 過ぎし日をば顧みん
しず おか え そよかせ なつ ゆう
- 三 みどり静けき丘の上に 微風わたる夏の夕
おとめ ほし したい りゆう まどべ ちかよ
- 乙女の星を慕ひつつ 寮の窓辺に近寄れば
さとし ひかり わか ひとみ なみだ
- 啓示の光またたきて 若き眸に涙あり
ちゆうめい あき つき まこと とちの
- 四 ああ澄明の秋の月 誠の友と野をゆけば
はすえ もり おくぶか おもい かた きみ われ
静寂の森の奥深く 思索を語る君と我
ちへい かなた ぶじ ね ふゆ ひ かげ
- 五 地平の彼方富士の根に 冬の陽ざしの影ろひて
こがらしまへ す おちば まい おとす
- 木枯窓を過ぎゆけば 落葉の舞の訪れに
たかん ゆうしいま こも きよ まとひ
- 多感の遊子今はただ 籠りて清き団樂かな
まな にわ はる あき みとし ちぎ あさ
- 六 学びの庭の春と秋 三年の契り浅けれど
かた え たま い のぞみ ひかりむね ひ
- 交みに得たる魂を呼び 希望の光胸に秘め
いこい おか え だんりゅう はえ
- ゆふべ憩ひし丘の上に 四寮の栄をたたへなん

昭和寮は、昭和三年（1928）に下落合に完成した高等科生のための寮である。昭和二十六年（1951）に売却され、現在は日立製作所の迎賓館になっている。

せいうんりきうりゅうか
青雲寮寮歌

舎監教授・清水 文雄 作詞
中等科学生・山田 和男 作曲

一 さつき そら ふかみどり しらくもか め じ
五月の空の深碧 白雲翔ける目路のはて
くおん ひかり
久遠の光かがよひて あ、青雲は我を呼ぶ
あわれ よ
あ、我を呼ぶ

二 とぎ うしお たかな よみがえ ふうそ ち
時の潮の高鳴れば 蘇りくる父祖の血の
われら むね
我等が胸にたぎるかな あ、青雲は我を呼ぶ
あわれ よ
あ、我を呼ぶ

三 わか いのち ちかい しんしんれんま あさゆづ
若き命に誓ひてし 心身錬磨の朝夕に
おもい は りそうきよう
思ひは馳する理想郷 あ、青雲は我を呼ぶ
あわれ よ
あ、我を呼ぶ

昭和十五(1940)年には希望寄宿の中等科三年生が「青雲寮」に入寮した。

しちうねんりょうりょうか

少年寮 寮歌

教授・岩田 九郎 作詞
梁田 貞 作曲

一 国旗みはたがかけて九重ここのえの 皇居こうきよ拜まはらむ暁あけの空そら
将軍しょうぐん乃木のぎのそのかみを 偲しのぶもゆかし今いまここに
あ、栄あはえある伝統でんとう ゆかし我が寮わ りょう

二 花はなの吹雪ふぶきの丘おかの上うえ 月つきも牙さやけき窓まどの辺へに
協同きょうどう自治じのその誓ちかい 結むすぶも楽たのし目白台めじろだい
あ、盡あつきせぬ友情ゆうじゆう たのし我が寮わ りょう

三 高たかき祖先みおやの名なに恥はじめぬ 熱ねつと誠まことを君見きみみずや
勤勉きんべん錬磨れんまのその訓おしえへ 励はげむもうれし朝夕あさゆふに
あ、輝あかがやく前途ぜんと うれし我が寮わ りょう

昭和十年(1935)に中等科二年生は原則全寮制となり「少年寮」に入寮した。

昭和寮寮歌（新寮）

- 一 かんらく ゆめいまさ ち こえ
歓楽の夢今覚めて 枯葉は散りて声もなし
れいさうつき てら かげ
- 二 玲瓏月は照らせども 梢にかかる影もなし
かた とも うれ い か われ な
語ろう友に憂いあり 如何でか我の泣かざらん
こぞえ かんげつ な かんはせ なみだ
- 三 梢にかかる寒月に 汝が顔は涙せる
いで とも かれこたち あかほしそら あお
出ては共に枯木立 明星空に仰ぐべし
い とも せんてつ いさお われ っ
- 四 入りては共に先哲の 功や我ら継がざらん
な うれい わ なみだ な よこ われ っ
汝が憂は我が涙 汝が喜びは我が幸ぞ
みとせ くらしは むね なんじ わす
- 五 三年の生活果つるとも 胸に汝を忘れめや
とも しんぎ おも いと なさけわれ
友に信義の思いあらば 愛しき情我にあり
りそつ みち とお ゆくて かわ
理想の道は遠くとも 行手のなどが変わるべき

昭和二十二年（1947）に学習院は私立学校となり、学習院大学を開学した。
官立時代の昭和寮は資金調達のために売却され、（新制）学習院大学の学生寮として
新たな昭和寮が昭和二十七年（1952）に建設された。

しちうわりのちうていしうしうか
昭和寮 逍遥歌

- 一 春尚浅き丘の上 紫煙り雲は凝り
はるなおあみ おか うえ せうりなせけむ くも こ
あかほしそら
- 二 明星空に消えゆかば 白亜の仮寝ゆすぶりぬ
きそ ばんだ はなふぶき つき はくあ かりね
競う万朶の花吹雪 月はおぼろに香をこめて
きみ なむけ せちくはこ く かえ はなうたげ
- 三 君が情の玉杯に 汲みては返す花宴
ぼうよう は びさしの みどり ゆう ぎん
望洋果てなき武蔵野に 緑の夕べ吟ずれば
ひようびようなが むるへ きりぐも ちちびやま
漂々流れ寄辺なき 切雲かかる秩父山
せい なや い せいの ちちふやま
- 四 生は悩みと言いものの 分けても春はしかあらん
な かな いこと こと うれい なる せいの ちちふやま
もつれてとけぬ糸の如 憂はつきぬ草枕
な かな われ な な うれい なる せいの ちちふやま
- 五 汝が悲しみに我は泣き 汝が喜びに我踊る
じんせい い き かん わか ちしおひ も
人生意気に感じては 若き血潮火と燃えん
みやこ ちり よそ みずか おさ わ しろ
- 六 都の塵を他にして 自ら治む我が城は
しんり いずみぶか えいじう つと ほん
真理の泉深くとも ああ永劫に努めけむ

学習院大学の昭和寮で、集まっては歌われた。

そかいがくどう たまわ
疎開学童に賜りたる御歌 みうた

皇后陛下 (香淳皇后) 御歌
こうしゅうへいがか こうじゆんこうしゅう みうた

昭和十九年(1944)に賜る

学習院教授・小出 浩平 謹作曲

つぎ よ せ う
次の世を背おふべき 身ぞたくましく
ただ び うつ
正しくのひよ 郷に移りて

先の大東亜戦争で、帝都が無差別空襲にさらされたので、学童は地方に疎開した。
この御歌は、文部省により昭和二十年(1945)二月十一日の紀元節に一般に発表され
た。

にっこうがくしゅういんけんだんじ にっこうそかい うた
日光学習院健男児 (日光疎開の歌)

初等科長・杉山 勝栄 作詞
初等科教諭・外山 國彦 作曲

一 はは えがお えがお こた かた かくこ にっこう く
母の笑顔に笑顔で答え 固い覚悟で日光に來れば
ほく きょう けっしたい も もみじ ほほそ
僕も今日から決死隊 燃える紅葉に頬染めて
われらがくしゅういん けんだんじ
我等学習院の健男児

二 へ え かんぷうはだ なんたい じつとこらへてにっこうとむか
寒風肌さす男体おろし じつとこらへてにっこうと迎
きたえきたえ こころ そかい からだ
鍛へ鍛へたこの精神 疎開みやげにこの体
われらがくしゅういん けんだんじ
我等学習院の健男児

三 こころす ぶみよ まじ ひび だいや なが
心澄まして文読む窓に 響くどろどろ大谷の流れ
ほつと一息背伸びすりや うれし夕餉の鐘が鳴る
われらがくしゅういん けんだんじ
我等学習院の健男児

四 きょう げんき たかな いき こめて書いたぞ にっこうだよ
今日も元氣と高鳴る意気を こめて書いたぞ 日光便
ゆめ で き ちちはは みんないてみるよ い
夢に出て来た父母が みんな見てゐる読んでゐる
われらがくしゅういん けんだんじ
我等学習院の健男児

昭和十九年(1944)八月に、皇太子殿下、義宮殿下は、同学年生達と空襲下の東京から日光に疎開された。

更に、昭和二十年(1945)三月に集團学童疎開で初等科中等科生は日光に疎開し、金谷ホテルを「学習院日光学寮」とした。

更にこの疎開組は同年十月に静岡県沼津游泳場に移動し「沼津学寮」とした。沼津学

昭和二十一年(1946)二月開演。。

「私は「学習院の歌」の中にある「わくらのきしゅう」と「運動会の歌」の他に、やっぱり私の作詞した「日光疎開の歌」という忘れられない歌があります。

疎開中毎日歌われた歌です。

日光に疎開したのは、たしか、戦争がいよいよ身近に激しくなってきた昭和十九年の八月末だったと思います。

日光というと、誰でも知っている所であるし、しかもその頃は日本でも有名な「金谷ホテル」が、その宿舎になったわけですから、ちょっと素晴らしいように思われませんが、実はこのあたりは、山々の間の大谷川のほとりに僅かの田畑があるだけで、しかもその土地は肥えていないで、食料は本当に乏しい所で、生活するには大変な所だったのです。

こんな所で、皇太子様と同学年の五年生と義宮様と同学年の三年生との合計、たしか百人余りの疎開生活が始まったのです。

そのうえ、九月にもなるともう朝晩は寒くて、十月早々紅葉も過ぎると男体山には雪が降りもう冬なのです。

私は、まだ小さい子供達が遠く親と離れてのひもじくてさみしくてたまらない、その毎日の生活を見てみると、私自身もいたたまれない気持ちでした。

父親代わり母親代わりの、そういったつもりで、そういう気持ちで精一杯面倒をみてやり、言葉でいくら励ましてやっても、子供達にとってはなんとしても耐えられないものがあつたのですね。

表面はともかく、心の中では子供も私もつらくてやるせない毎日が続きました。

そんなとき、私の心に湧き出てきたのが、この「日光疎開の歌」でした。子供達の身になって、それに私の願いも籠めて、たしか一晩で作詞したものです。その作詞に音楽の先生が、たしか外山先生ですけども、外山先生が素晴らしい作曲をして下さって、早速それから毎日歌い始めたわけです。

とくとくと、夜寝る前には毎晩のように歌いました。そうすると、なにか安らかに眠ることになるらしいんです。

そうして、この歌を歌っているときだけでも、子供達の顔つきは何となく明るくなり、ほっぺたが赤らむように、私には思われました。

とにかく、日光で何回歌ったことだろうか。

こういう訳で私にとっては忘れられない歌です。今でも直ぐ歌えます。当時を思い浮かべながら歌ってみます。

（この後、独唱）

まあこうして、この歌は終戦とともにその生命を終わったわけですが、しかし、御成年式の時だったか、NHKが皇太子様のことを放送するときに、是非この「日光疎開の歌」を入れたいからと、私に歌の言葉を確かめられたことがあります。

そして放送が終わった後で、たしかライターだったかNHKから記念品をもらったことがあるけれども、あれを聴いたときにはなんとも懐かしい気持ちで、真に感無量のものがありました。」

（文章化：井原）

昭和十九年（1944）には、学徒勤労動員で、中等科生は茨城県東茨城郡内原訓練所、神奈川県小田原市の多古工場など地方へも動員されており、寄宿している。

山形県鶴岡市に行った中等科の農耕勤労隊は「学習院出羽（いでは）寮」、「風間寮」に寄宿した。

のうじう
うた
農耕の歌

女子学習院助教・青木 正男 作詞作曲

一 きょうじ は わとも いざや だいちをふみしめて
わが 若きいのちを惜しみなく この ありうち 荒土にそそぎなん

二 かまた かわ みずおと
鹿股の川の水音は しばしも止まず 吾等また
たま あせ い 共に雄々しく耕さん
たがや

三 ひこの はた さち あおお あめうち
日毎伸びゆく畑の幸 あゝ大いなる天地の雲
う 仰げば紅し峰の雲
くも

大東亜戦争末期の集団学童疎開として、女子学習院は昭和十九年(1944)八月に西那須野塩原塩の湯に、初等科四年生以上中等科二年生までの希望者の疎開学園を開いた。同年秋から週一回の農耕作業が、中等科一二年生の課業となり、農耕の歌を歌って農作業にいそしんだ。
昭和二十年(1945)三月戦況の悪化に伴い、初等科三年生も西那須野の三島分園に疎開した。
三島分園でも農耕作業は行われた。

疎開学童は昭和二十年(1945)十一月に西那須野から引き揚げた。

そうじょうかい うた

草上会の歌

山上 路夫 作詞
いずみ たく 作曲

一 ほほえみあえはわかる心 JUN うなずきあえはわかる想い おも
うれ 嬉しいときも かな 悲しいときも わたしの心 JUN にうかがぶのは
あなた 貴女とあなた あなた 貴女とあなた
ともに学んだお友達 まな ともだち

二 話 はな していれば時 とき を忘れ わす 一緒 いっしょ にいればそれで たの 楽 い し
ひじろのときも なび 淋 しみ しいときも わたしの心 JUN に い 生きてい る

あなた 貴女とあなた あなた 貴女とあなた
そた あすのしあわせ育 そた てまじょうじ

学習院の女子に対する後期高等教育は、昭和二十年(1945)開設の女子学習院の研究科が、新制の女子教養学園(昭和二十三〜二十七年)に続いた。

更に、昭和二十五年(1950)戸山校地に設けられた学習院大学短期大学部(二年制)は、昭和二十八年(1953)「学習院女子短期大学」となり、平成十三年(2001)五月ほぼ半世紀に及び歴史を閉じた。平成十年(1998)同所に四年制の学習院女子大学が開設された。

草上会(そうじょうかい)は、昭和二十年・三十年代の女性の社会活動に則して講演会・講習会・バザーなどの活動を行う学習院女子短期大学同窓会として昭和三十四年(1959)「発足し、安倍能成院長により「草上会」と命名された。マナー筆の「草上の宴」に描かれている女性のよう輝いた存在であってほしいとの意味であると同った。

現在は学習院同窓会として桜友会と一体になり、学習院女子短期大学及び学習院女子大学の卒業生が所属する学部会として活動している。

がくしゅういんおうえんか
学習院 応援歌

大学生・内山 弘紀 作詞
堀内 敬三 作曲

- 一 もり上がる我等の力 もえたぎる我等の血潮
えいこう れきし は ちから われら ちしお
栄光の歴史に映えて あゝ学習院 今ぞ戦う
あがくしゅういん いま たたか
- 二 遙かなり我等のゆくて 越え行くは嵐の山河
はる ちから われら こ げ ありし さんが
躍進の力よ意気よ あゝ学習院 無敵の王者
やくしん ちから いき あがくしゅういん むてき おつじや
- 三 たくましき我等の腕に 青春の我等の胸に
たか しり せしゅん われら むね
こだまする高き調べは あゝ学習院 勝利の歌ぞ
あがくしゅういん しやうりの うた

学習院大学の運動部は戦後新制の大学ながら、馬術部や陸上競技部など戦前の高等科からの伝統を引継ぎ、全国的に名を馳せて活躍していた。

それら試合の応援の際に歌える歌が求められ、学内に歌詞を募集し、昭和三十一年(1956)に学習院応援歌が制定された。

特に野球部は昭和三十年(1955)に東都大学リーグ1部に昇格し、昭和三十三年(1958)には東都大学野球リーグ戦で優勝を果たした。このリーグ戦で応援歌は大いに歌われた。

現在も運動部の対外試合で、歌われている。

作詞者の内山氏は政治学科2年生、馬術部副主将を務め、全日本大会で準優勝、東京大会で優勝などされておられた。

がくしゅういんだいがくおうえんだん
学習院大學應援團

おうえんか
応援歌メドレー

(応援歌)

大学生・内山 弘紀 作詞、堀内 敬三 作曲

もり上がる我等の力 もえたぎる我等の血潮
えいこう われら ちから ちしお
あがくしゅういん いま たたか
栄光の歴史に映えて あゝ学習院 今ぞ戦う

(第二応援歌)

我が精銳のゆくところ 草木もなびて声もなし
わ せいえい くさき こえ
でんこういつせん えいほう くだ てき じん
電光一閃 鋭鋒に 砕けて散りぬ 敵の陣
くだ ち てき じん
砕けて散りぬ 敵の陣

エイヤ エイヤ エイ エイヤ エイヤ
エイヤ エイ エイヤ エイ エイヤ

電光一閃 鋭鋒に 砕けて散りぬ 敵の陣
でんこういつせん えいほう くだ ち てき じん
くだ ち てき じん
砕けて散りぬ 敵の陣

(第三応援歌)

いざ立て若人 我らが勇姿 不屈の闘魂 心に秘
た われら ゆうし ぶくつ とうこん こころ ひ
め
すす すす ちから かぎ でんこう しやうり め び
進め 進め 力の限り 伝統のもと 勝利を目指せ

エイヤ エイヤ エイヤ

がくしゅういん がくしゅういん われら ちから
学習院 学習院 我らが力

(第一闘魂歌)

てきせいいくまん 敵勢幾万ありとても
わこうども 若人燃え立つ闘魂を
ばんり はとう の こ 若人燃え立つ闘魂を
かかせ
万里の波濤を乗り越えて輝かせ
すす すす
がくしゅういん 学習院 勝つぞ 学習院
がくしゅういん 学習院
いざ行け轟くその名 花の学習院
はな がくしゅういん

勝つぞ 勝つぞ 学習院！

勝つぞ 勝つぞ 学習院！

(学習院マーチ)

わ 湧き上がる闘志 巻き起こせ 追い風 駆けて行
あ とうし ま お お かせ か い
け
われ 我ら 勝利目指し いざ行くぞ
しちりめ び い

勝つぞ 勝つぞ 学習院

がくしゅういん 学習院 学習院
がくしゅういん 学習院
ブローブリンナー
がくしゅういん 学習院

學習院大學應援團は、リーダー部、チアリーダー部、吹奏楽部よりなり、團員は學習院大学生及び學習院女子大学生である。
四大学對抗戦、甲南戦その他の各運動部の対外試合の応援に活躍し、またそれぞれでチアリーダー大会出場や吹奏楽部演奏会などの独自の活動も行っている。

がくしゅういんけんどうぶが
学習院 剣道部 部歌

高等科学生・秋田 一季、戸田 忠英 作詞

- 一 桜は春を飾れども 長恨若き胸に湧き
はる おし かな ちやうじんわが むね わ
 - 二 春の驕りをよそにして 武道の誉磨か
たま あせ しの びどう ほまれみが かいな
玉なす汗を忍びつつ 鍛へし腕吾が腕
せいぎ まも はじ し われ まこと ものゐ
 - 三 正義を守り恥を知る 吾は誠の武士よ
あきじやうけん せいとま ころえ ひやう みね じやう
秋城北の鬨の声 芙蓉の峰に轟きぬ
ま ほう ふうこんとわ っ
 - 四 ああ仇敵を屠らずば 雄魂永遠に尽きざらむ
しもぶ くだ あ ま けうこんとわ へげ けんし
霜踏み砕き明けぬ間を 来りて励む剣士かな
はだつん びくひやう われら いき いか
肌劈ざかん朔風も 吾等が意気を如何にせん
そくりつ いくせいそう れきし ひか ぶどうじやう
 - 五 創立ここに幾星霜 歴史ぞ深き武道場
あ あ からだ じよう そくく はえ かき
嗚呼この身体この心 祖国の栄を飾らんか
そくく はえ かき
- 祖国の栄を飾らんか

学習院剣道部は、明治十二年(1879)に剣道が正課として取入れられたことに発し、戦後の武道廃止の時代を経て、昭和二十八年(1953)に高等科で復興され、その後大学、高等科、中等科、初等科、そして女子部と各科剣道部が発足し、学習院の基本理念である一貫教育を初等科より大学生まで各科を通して実践している唯一の運動部である。先年に創部百二十周年を迎えた。

部歌は昭和十二年(1937)、先輩達の現役支援組織「剣桜会」の設立を機に、高等科三年の秋田、戸田両先輩が作詞した。その歌詞には四季に亘る剣道の修練が読み込まれており、現在まで歌い続けられている。秋田先輩は戦前戦後半世紀にわたって剣桜会会長として剣道部の指導に当たられた。

明治四十一年(1908)に田口でできた柔剣道場は、嘉納治五郎の設計した武道場である部員に愛されてきたが、昭和五十三年(1978)の創立百周年の際に取り壊され、現在では北グラウンドに新たな武道場が建設され、活発な部活動の場になっている。

しよとうかけんどうぶ うた
初等科剣道部の歌

剣道部OB・佐藤 蕃 作詞
初等科教諭・高川 進作 作曲

一 桜の花の咲き匂う 四谷の空を仰ぎ見る

武道に磨く身と心 竹刀とる手に通う血が

学習院の伝統と 明るい未来作るのだ

われら われら 初等科剣道部

二 ダボスの丘にこだまする 気合いをこめて振りぬいた

千本素振り思い出に 力合わせた合宿で

かたく結んだ友情は 僕の私のためからもの

われら われら 初等科剣道部

三 日ごろの稽古積み上げて 迎えた晴れの初等科祭

剣道形はうつくしく わびくらし出して戦った

試合の後はさわやかに たがいにかわすその笑顔

われら われら 初等科剣道部

四 ねむけも寒さもふりきって しどろ目白の体育館

先輩たちに負けないで みんなががんばる寒稽古

皆勤賞を胸に抱き 家路をたどる誇らしけれ

われら われら 初等科剣道部

学習院初等科剣道部創部四十周年記念（平成十七年（2005）発表）

初等科の敷地は、幕末明治の剣豪の山岡鉄舟の屋敷跡であり、雨天体操場は山岡邸の道場「春風館」の位置であった。昭和十五年に山梨勝之進院長は、春風館と揮毫した額を掲げ、武課の道場とした。昭和四十年（1965）初等科に剣道部を創部した。ダボスの丘は、夏合宿する菅平高原にある。

がくしゅういんゆうえいぶ
学習院 游泳部 部歌

高等科学生（文二） 藤田 謙五 作詞
高等科学生（理二） 戸澤 秀壽 作曲

一 あおばわかば かぜかお
青葉若葉に風薫る 時こそ来れ青春の

ちかり

力はここに目醒めたり

わとも

おお我が友 いざ跳べ水に 飛沫を揚げて往くとこ

と

みす

ひまつ

あ

ゆ

ろ

がいか

たか

ゆうえいぶ

凱歌は高し 游泳部

二

そら

す

こんぺき

空は澄みたり紺碧の 色こそ映ゆれ水の上

いろ

は

みす

うえ

だんけついま

ゆる

団結今ぞ揺ぎなし

わとも

おお我が友 いざ起て共に 奮闘錬磨撓みなく

た

とも

ふんとうれんまたわ

えいよ

たか

ゆうえいぶ

栄誉は高し 游泳部

昭和十五年（1940）制定

がくしゅういんりょうきぎぶ
学習院陸上競技部

ぶか
部歌

高等科教諭・松尾 聡 作詞
高等科教諭・藤原 義久 作曲

一 きたえ じぶん
鍛へんわれらが心
らんまん は ためさんわれらが力
爛漫の櫻に映えて 若人は投げ跳び走る

二 でんとう むな
伝統は空しからめや 幾十年雄々しく清き
お 励み合ふ数々のわざ
ますらをやいやつぎつぎに

三 み きみさかま なみ あお きみはば つる
見よや君逆巻く波と 仰げ君羽搏たく鶴と
こうてい あふ ちから えんせい そな まった
校庭に溢るる力 遠征に備え全し

四 わかくさ めじろ おか しゅうり はたたか かか
若草の目の丘に 勝利の旗高く掲げて
せんじん のこ いとお ま われら て
先人の残しし功 いや増さん我等が手もて

五 ささ んわれら いの あおぐも はて そら
捧げてむ我等の祈り 青雲の果なき空に
がくしゅういんりょうきぎぶ な ふじの嶺ゆいや高かれと
学習院陸上の名は 富士の嶺ゆいや高かれと

四番 「青雲」は季節「つよつて」「若草」「夏草」「秋草」と読み替える
昭和五十年(1975)制定

ボーイスカウト東京豊島第一団 団歌「目白の森に」
めじろ もり

団長・鮫島 達也 作詞
元団員(作曲家)・都倉 俊一 作曲

一 目白の森に集いし我ら 誓いを立てて助け合い
めじろ もり つと われ ちか た たす あ
ひかり みち 誓いを立てて助け合い
光の路をたゆみなく 共に目指して歩み行く
われ われ 共に目指して歩み行く
我らスカウト 学習院 がいしめういん

二 青空の下皆でともに さだめを守り元氣よく
あおぞら もとみんな さだめを守り元氣よく
つよ からだ きた 明るい笑顔で輪になって
強き身体を鍛えよう 輝け僕らのカブスカウト隊
かがや ぼく たい

三 厳しき自然にそなえよつねに 我らのテントはゆるぎな
きび しぜん われ
せかい とも かた く 我らの友と肩を組み おきてを守り進み行く
はばた あした たい
翔け明日にボーイスカウト隊

四 羅針盤の指すこの路を 己を信じ名譽にかけて
らしんばん さ みち おのれ しん めいよ
あす しどうしゃめ び ゆ 明日の指導者目指し行き 大きな未来に夢かける
われ われ 大きな未来に夢かける
我らスカウト 学習院 がいしめういん
我らスカウト 学習院

ボーイスカウト東京豊島第一団は、学習院ボーイスカウト隊とも称し、
隊員は学習院生である。団室は目白にある。

この団歌は平成十二年(2000)の結団五十周年を記念してつくられた。

学習院の歌の集いについて

明治十年(1877)開業からの学習院の長い歴史を繙くと、式典や輔仁会活動に際して学生が声を揃えて歌った多くの歌があります。教職員は勿論のこと卒業生や父母なども一堂に会する折に歌ってききました。

我々卒業生がそれらの歌を歌い継ぐことにより、世代を超えての一体感が醸成されます。こうして学習院の伝統を次代へと継いでゆくのですね。このような使命を担っているのがこの歌の集いです。

昭和四十四年(1969)に、それまで幼稚園から大学までの在校生・教職員が一堂に会していた天皇誕生日奉祝式典(四月二十九日)、開院記念日勅諭奉読式典(十月十七日)、輔仁会大会(院祭)(十一月三日)は中止となりました。その後は、院祭は各学校別の文化祭となり、式典も催行されることなく、一貫教育とはいえ、学習院各校の在校生などが一堂に会する機会は皆無となってしまうました。

昭和六十年(1985)に桜友会は、何とかして学習院一貫教育を具体的に示す行事を行いたいと、在校生、教職員のみならず父母及び卒業生が一堂に会する園遊会を企画しました。関連団体と協議の結果、昭和六十一年(1986)より学習院が主催し父母会、常警会、桜友会が共催団体となる「花見の集い」が毎年四月に行われるようになり、現在は「オール学習院の集い」となっています。

第一回花見の集いの来会者は数百名でしたが、第二十三回オール学習院の集い以降は一万人を超えています。馬場での体験乗馬会、目白構内史跡巡りなど様々な催しや、幼稚園児から卒業生まで参加する音楽部大合同演奏会、輔仁会各部の卒業生と在校生の会合、桜友会全国支部の参加などがあり、卒業生と在校生、教職員、父母との連携は強まってきており、初期の目的は達せられていると思われれます。

学習院の歌の集いは、(旧制高等学校の)日本寮歌振興会に参加していた桜友会寮歌委員会の流れを汲んで、学習院の歌を若い世代に歌い継ぐため、輔仁会音楽部や男子部女子部その他大勢の有志のご協力を得て、オール学習院の集いに平成二年より参加してきました。

「オール学習院の集い」の開始が正堂の開会式、国歌及び院歌の斉唱であれば、閉会は正堂の観客席、壇上出演者が一体となった学習院の歌の合唱が望ましいものです。催行時間の制限はありますが、この学習院の歌の集いでは多くの歌を歌い継ぎます。

壇上出演者だけでなく、観客席の皆様も共に声を出して歌ってください。

(歌詞などの説明文の文責は歌委員会にあります)

平成二十八年 学習院の歌委員会 井原記